

の後始末、きめられた範囲内で遊ぶこと、などを体験を通して理解させましょう。

## ●十一月

多彩な行事から落付きをとり戻し、冬への基礎をつくるように努力しましょう。また、やりかけたことは終りまでなしとげるように指導しましょう。収穫期をひかえて、働く人々の様子を見学させて、勤労の尊さも指導したいものです。それとともにできることは、喜んでお手伝いする態度を育てたいと思います。

## ●十二月

寒さにまけない強い体力をつくるよう、冬の衛生に注意しましょう。室内遊びが多くなりますから、特に換気に注意しましょう。暖房をかこんで楽しい集りが多くなります。多くの行事や、豊富な生活経験が、深みゆく秋とともに実を結び、初冬のこの頃にかけて子どもたちも心身共に伸びて、全般的にレディネスがたかまっていますから、外部に集中する眼を内に向けてよにみちびきたいものです。自分の行いを反省する態度もつけていきたいものです。また、音楽の遊びの中に劇あそびやリズムあそびをとりあげて、自然な形のうち子どもたちの創意を生かした発表会ができるように、集団生活の中で協力し、また自己を充分に發揮できるようにみちびきたいと思ひます。そして、お正月を迎えるたのしい準備のうちに二期を終りにしたいものです。(筆者は松本市立松本幼稚園教諭)

# 一学期の反省と夏休み

杉 本 陽 子

園庭の桜の花が咲きそろった四月、新入園児を迎え入れて、それからの一日一日を家庭の赤ちゃんから幼稚園の子どもに早くなれるように、お互に努力しあい、やっと特別の子どもを除いては、新しい環境に適応するようになったと思つた頃、もう夏休みが眼の前に迫っているのに驚かされます。そんな時、やはり二学期こそ期待をもって迎えられるという気持がしますが、事実また、二学期の子ども姿には、入園の頃の緊張感や不安定さなどは影を消してしまつて、いかにものびのびとした様子がみられます。とくに、二年目の秋を迎える年長組の子どもたちが、もうすっかり園の生活を自分のものにして、恵れた自然の中で、自由に活発に過す姿を見るのは楽しいものです。そこで、こうした学期を最も有意義に過すために、なれない一学期や、卒業進級を控えて心忙しい三学期とは、また違った意味での準備や心構えが、私たちの側にも必要となってくるのは当然のことでしょう。まず、二学期を考える時、そこに横たわる大きな問題として、夏休みというものが浮びあがってきます。やつとなれたと思つた幼稚園とも、夏休みになれば、しばらくの間、離れなければなりませんので、子どもたちにとつても私たちにとつても、園生活をこのまま続けていくのとは異り、そこにいろいろの問題が提出されてきます。そこで、それらの解決をするともに、で

きるだけ障害を少くして、順調に二期期への導入をしていくことによって、新学期をより楽しいものにしたいと思います。

以下、私のつたない経験の中から、二期期にそなえて、これまでにやってきたこと、また今年はどうしたいと考えていることなどを記してみたいと思います。もちろん、一年を通じての全体の計画は、すでにたっているでしょうし、一学期中の指導はすべて二期期へひきつがれていくわけですので、二期期の基礎は、一学期からだんだんと、積み重ねられてはいるのですが、やはり、一学期を過してみた経験によって二期期の保育計画に、新しい要素や改良点などででてくることも予想されます。こうして見た時、実際の指導の準備は、この夏休みになされるとみた方が適当かも知れません。

夏休みを終えて、九月に登園してきた子どもたちを観察してみると、感じることは、何といっても家庭環境のいろいろな影響をうけて、全体的に、集団生活の規則的な面が欠け、幾らか、だれ気味になっているという印象です。そこで、これらの点を多少とも、スムーズにするために、次のような方法をとりました。

#### ○生活指導・健康管理について家庭と連絡をとる。

まず夏休み前に、母の会の集りを開き、一学期中に園で指導したもののうち、家庭でもつづけてほしいものや、夏休みを健康によりよく過すために、守ってもらいたいものなどを個条書きにした紙を渡して、説明し、理解を得た上で、お休み中協力してくださいように話しました。また、衛生面については、一学期中の母の会の例会を利用して講演会をもち、子どものかかり易い病気の説明や、夏の健康管理についての知識を得ました。お休み中の毎日は、ワークブックの夏の生活表を使って、一日の生活をなるべく規則正しいもの

に自分からするようにしむけてみました。

#### ○子どもについて話し合う機会を持つ。

この頃になると、四月から七月までの期間の経験によって、いろいろの問題点をもつ子どもが、大体はつきりと浮びあがってきます。問題児といっても、特別な社会的な意味をもつものでなく、泣き虫とか、自我の強いもの、規律を乱すもの、無口なもの、お弁当を残すものなど、いろいろな子どもたちが、私たちの周囲にはたくさんいることと思います。これらの子どもたちも、しばらくは園から離れますので、九月にまた逆もどりの状態になる率を少なくするためにまた一学期中に指導した経過を説明して協力を求めるためにも、母親との話し合いをする機会をもちたいと思います。これは、本当はひとりひとりの子どもについて、言えることですので、全部の母親との面接をしたいと思います。今のところ、折にふれ話し合う機会をもつ程度にとどまっています。この母親との話し合いは、一学期を共に過したことによって、お互いを理解し合うことができそうですので、割合に効果があり、また思いがけず問題児の未知の面にふれて、二期期の指導に一つのヒントを得たこともありました。

#### ○夏期保育に参加する。

長い夏休みを家庭で過すことによって、集団生活で折角身についたよい習慣が、くずれないように、また、二期期への導入を順調にする一つの方法として、新学期の始まる一週間程前の日曜日はさむ数日を皆で楽しみながら過す日ときめ、夏期保育をしました。保育の内容はなるべく全園児が集って幻燈をみたり、夏のリズムに興じたり、面白い製作を楽しんだりし、お休みの間にどこにも行かれ

なかつた子どもたちにも思い出になるふん囲気をつくりあげられるようにしました。自由遊びの間には、木陰や芝生を利用して、できる範囲内で自由に自然とたわむれることができましたので、年長年少いりまじって遊び、先生たちとの親しみもずっと増したように感じられました。お休みの間に、ちょっと、だれていた気分を調整して、二学期にはいることができたと思います。

○お休み中の通信によって親しみをます。

海や山や田舎へ行った子どもたちからの絵葉書や、字のかけない子どもから、葉書一ぱいに庭の花の絵を描いた便りをももらうことがあります。これらの手紙に返事をかいて送るというちょっとした心遣いが、案外子どもたちの心はずませ、幼稚園を楽しんで待つ気持ちを引き起させるものです。幼稚園の教師になった初めての夏休みに、子どもたちひとりひとりに、絵を描いた便りをした時、九月にあつた子どもたちの話題が、一番に「先生から手紙もらったよ」ということだったのを忘れられません。

今まで、子どもを中心としてのべてきましたが、一方、私たちが日頃の慌しさの中からぬけだして、もう一度、冷静に子どもたちの世界を見、実体にそくした保育計画をたてたいと思います。

○子どもたちから一歩離れて子どもたちをみる機会にする。

一学期中の毎日、私たちの頭には、いつも子どもたちの姿が身近かにありすぎて、かえって見落していた幾つかの点があつたようです。そこで、お休みの間に子どもたちのひとりひとりを、もう一度しっかり頭に入れておきたいという要求から、園児の知能テストをおこなってきました。これによって、知能の大体の目安がはっきりしてくると共に、そのこと自体よりもテストをしている間の子ども

たちの態度を観察することができ、それもあわせて二学期の参考にになりました。

○保育計画を再検当する。

二学期は遠足、運動会、クリスマスなど、園全体の行事も多い時です。子どもたち皆が心も身体も健康で本当に楽しんでこれからの行事に参加できるようにしたいと思います。一学期の間は園になれ親しむこと、先生やお友だちと仲良く遊べることを目標としてきましたので、今度は、それをさらに発展させて、自主自律の精神を持ち、それぞれの子どもが個性に応じて自由にのびていくようにしたいと考えています。とくに、九月に多少とも逆もどりました子どももあることを予想し、それらを順調なコースにひきもどしていくことにも気をつけて進みたいと思います。そのためにも、幾らか巾のある計画をたてておきたいと考えています。

○園の設備の補充や整理をする。

暑い夏の間にくずれた健康をとりもどすためにも、二学期は充分恵れた季節ですので、戸外でのびのびと運動したり、美しい自然の変化を観察したりすることができるように、園の設備に、いろいろの心くばりや工夫が加えられるとよいと思っています。また、今まであった器具などの使い方を工夫してみることによって、新しい感覚が盛られるかも知れません。紙芝居、レコード、図書の整理はもちろんのこと、教材の補充などにも気をつけて、あわてることのないようにしたいものです。いつも使っている保育室はかえって眼がいきとどかず、壁にはった絵や表の画鋏がはずれていたりして、はっきりとすることがありますので、ここにも気をくばり、ボールドの裝飾なども考えて、すみずみまで、いきとどいた暖かきで、二学期を

迎えたいと思います。

また、私たち自身も、一学期中の整理をすると共に、普段できなかった読書を楽しんだり、講習会に参加したりすることによって、新しい知識を身につけ、さらに充分な休息もとれて、二学期の保育に新鮮さを加えるように努めたいと思います。

(筆者は成城幼稚園教諭)

## 東京の商業中心地の 幼稚園の課題

手塚佐枝子

四十日以上続いた夏休みが終ると、すっかり陽焼けした子どもたちが、幼稚園に帰ってくる。また幼稚園の生活がはじまる！そして一学期の終る頃には、思うようにいかない生活指導と、重なる過労でいささかうんざりしていた私にも、またあふれるような元気と、輝かしい希望とがよみがえってくる。さあ二学期はどうしようか――

普通、新入園児の一学期は団体生活になれることに費される。しかしながら、私のいる西神田幼稚園では、それ以前の課題のために、まず一学期を使うことにしている。この辺は、東京の商業が堅実に動いている処だ。両親はもちろん、家中が働くことは当たり前であり、子どもだからといって特別の保護された生活が待っている訳ではない。だから子どもも平気でおとなの口にする話題――たとえば金銭のこと――を、日常の会話に持ち込むし、おとなもそれをとが

めようとはしない。よく言えばしつかりした、悪く言えばあまりに現実的な人間の雛型が生れるわけである。それに忙しい生活は虚飾を去る代り、容赦を与えない。そこで日常生活の基本的しつけすら、しつかり身につけているとは思われないのである。

そういう子どもたちがドヤドヤと四月から幼稚園に預けられる。私たちは、まずこれらの子どもたちみんなに、夢を与えたいと考えるのである。いきなり集団の中の一員としてしつけをするより以前に、今までの生活史から言って少々欠けていると思われる子どもとしての面を、豊かにきれいに引出してみようと思うのである。

ある年の四月、大変元気のよい子が入園した。保育室の片端にあるままごとの人形を見て「これいくら」といったのが最初のことばだった。椅子にじっと座ることも知らず、挨拶すらできない子だった。気がつくくと、校庭のコンクリートの上に寝そべっていたり、飼育箱からうさぎやはとを追い出したりした。注意をすると、すぐおもてへとび出す。

これは、この子に限らず大なり小なりの型でこの地域の子どもにみられる傾向だが、私たちは先ずこんな子どもたちに大きな声をあげて庭中を走らせた。風車をまわして競走させた。そしてもてあましていた勢力がだいぶ失せた頃、円陣をつくってレコードを聞かせながらお話をしたり、紙芝居をみせたりする。そんな時子どもは割合に落着いて、こちらの計画についてきた。ある時、「みえなくなた椅子」の話を半信半疑のようすで聞いていた一人の子が急に立ち上り、自分の椅子に耳をあてて、

「チェッ、先生うそいってらァ。椅子なんてしゃべりゃしないよ」